

仁藤彩智

戦争報道分析

—現代におけるジャーナリストの戦争報道の意義—

要旨

本研究は日本で戦争報道の必要性が疑われるようになった背景を、ジャーナリストへの「自己責任論」を中心に検証した。

2004年のイラク日本人人質事件をきっかけに危険地に向かい事故に巻き込まれた3人の日本人に対する激しいバッシングが起こった。それらとともに「自己責任論」は広まり、更に2015年のIS日本人拘束事件で「自己責任論」は再燃し、政府による旅券返納命令など厳しい取材制限が行われた。

これらを背景に「貧富の差の拡大」「メディア不信」「SNSの普及による情報環境の変化」という3つの要因が複雑に重なり、危険地取材が「公的な活動」ではなく「個人の無謀な私的活動」と見なされるようになったという仮説を立て検証した。近年この認識が社会全体の共通認識として定着しており、「海外メディアや衛星写真を参照すれば十分である」といった見方が広がっているように、戦争報道そのものの正当性が疑問視される状況が生まれている点にも注目した。

また2015年にシリアにて拘束された安田純平に向けられた批判の言説分析を行った結果、批判の多くは感情的かつ誤情報の混ざった投稿が大半であるということが判明した。

結論として軍の統制や情報源が不確かなSNSによる情報が氾濫する現代こそ、日本独自の視点と正確性を担保する日本人ジャーナリストによる現地取材の意義は高まっている。